



古希記念婦省植樹(2015・4・吉日)
亀澤 健夫

古希記念婦省植樹(2015・4・吉日)
河島 良政

古希記念婦省植樹(2015・4・吉日)
加川 勝次

古希記念婦省植樹(2015・4・吉日)
重久 正光



国際法務 川畑行政書士事務所

INTERNATIONAL LEGAL AFFAIRS KAWABATA OFFICE



「弁護士法人パートナーズ法律事務所」及び「津田司法書士事務所」並び「小林田中税理士法人等」と緊密に連携し、ワンストップ法務サービスを提供致します。

〒171-0021 東京都豊島区西池袋 1-29-5 山の手ビル 9階 A

TEL:03-5904-8777、FAX:03-5904-8778、URL: <http://www.ila-sk.com>

「関東山和会 (<http://creative-award.yahoo.co.jp/>) も宜しくお願いします。

<p style="text-align: center;">社団法人 鴻巣市医師会立 鴻巣准看護学校</p> <p style="text-align: center;">井上 脩士</p> <p>校長</p> <p style="text-align: center;">学校 埼玉県鴻巣市中央2番2号 〒365-0032 TEL:048-543-1812 FAX:048-543-1810</p> <p>ホームページ: http://www.sakitama.or.jp/kfma/index.html</p>	<p style="text-align: center;">内科・小児科・胃腸科 北鴻巣クリニック</p> <p style="text-align: center;">井上 脩士</p> <p>院長</p> <p style="text-align: center;">〒365-0073 埼玉県鴻巣市八幡田 531 TEL:048-596-1423 FAX:048-596-6139 Email: syuji@mui.biglobe.ne.jp</p>
---	---

望郷徳之島—干瀬（ひし）の思い出—

NPO 法人徳之島「夢」振興会議 正会員
浄土真宗僧侶 亀澤一昭（慧照…亀津出身）

1. 吉満義彦を偲ぶ会

平成 26 年 12 月 14 日、3 年ぶりに開催され、私にとっては二回目の出席となった。出席者の中に、若松英輔さんがおられた。批評家・三田文学編集長。新著「吉満義彦 詩と天使の形而上学」が、吉満の命日に当たる 10 月 23 日に岩波書店から発行された。会にタイミング良く出席されたことで、昭和 63 年以来続いた会が、今回は、新たに盛り上がる感の有る集いだった。出席者一同が、忘れられた昭和の神学者が再び注目されるのではないかと期待が膨らんだ。私にとっては、難解な吉満の著作全五巻を読み学ぶのに、若松さんの作品が好個のガイドブックとなるものと喜んでいる。

前回の偲ぶ会は、若松さんはマネジメントする自社のイベントと重なり、残念ながら欠席された。既に、平成 22 年冬号の季刊三田文学で序章を掲載し始めていた。翌 23 年春の第一章で、吉満の生れ故郷徳之島の風土について述べている。徳之島は「コーラル文化圏」だと、民俗学者松山光秀の言葉を引用している。そして「島の海全体にサンゴ礁がある。満潮のときは、その存在がわからない。しかし、潮が引くと、波打ち際は遙か遠くになり、サンゴ礁が立ち現れてくる。」これが一冊の作品になった新著では、「浜、干瀬（ひし）、沖という三つの場が現出する。」と追加して表現している。そして、「このとき浜は、私たちが生きている『現実界』、沖は死者たちが暮らす『実在界』、現世と来世、此岸と冥界、干瀬となる『コーラル』は二つの世界を媒介する。」と展開する。

干瀬、この言葉に出会い、私は遠い昔の少年期、徳之島で過したときの風景がくっきりと思い浮かぶのを感じる。

2. 干瀬の意味

干瀬については、稲村公望さんの「黒潮文明論ふるさと心も姿も美しく」で、随所に触れている。「、、、西郷が流された奄美の島々を含めて、珊瑚礁が潮の干満で水面上に顔を出す部分を特定して『ひし』と呼んでいる。」とある。そして、その名称が地域によって、語句・発音が異なり、多くの事例を挙げている。柳田國男は「南海小記抄」で干瀬（ひせ）とルビをつけている。島口では何と呼んでいるのか。手元の徳之島方言本の中には日常会話しか出ていない。松山哲則さんにメールしたら、二度に亘って、情報源付きで返信を頂いた。

①「シーバナ（干瀬）」と記しております。（『徳之島の民族 2 コーラルの恵み』平成 14 年発行）

②「シバナ」海岸の岩礁の上。干端の意か。（岩倉市郎著『喜界島方言集』昭和 16 年発行）

③「シー」瀬。サンゴ礁のこと。干潮時の釣り場、潮干狩り場となる。また岸もシーである。（甲 東 哲著『沖永良部島のことば』昭和 62 年発行）

④「琉球語の干瀬（ひし）は一般にサンゴ礁を意味する。汀線付近から海側に広がる岩場」（『地名を歩く』内の、渡久地健氏解説『板干瀬（イタビシ）』の項目、南島知名研究センター編著、平成 18 年発行）。

若松さんの言葉、また、稲村さんは前掲書で「黒潮の禊場＝必志、干瀬、備瀬、尾嶼」と小項目のタイトルで表現しているなどから推して、干瀬は島人（ちゅ）にとっては、共有の資産であると思う。幼い私は、意識もせず受け入れていたのだ。

亀津のふなたいんばり、県道沿いにある共同墓地へ降りて、通り過ぎると、浜に出る。そこに立って、左手（北側）先に、黒くて大きな岩が見える。通称「軍艦岩」だ。立っている場所の、ちょうどうしろには、これまた大きな黒い岩がある。子供ごころに、聳え立っているように見えた。その岩に、白砂と風が吹き上げ舞い上がり、下の方が抉られてやや大きく窪んでいる。

雨つゆが凌げる広さだ。そして右手（南側）へと転ずると目の前は珊瑚礁が続き、前方（東側）遠くに太平洋を望む。ここの干瀬が変化する。

3. 干瀬が現れる

干潮時間は半日ある。満ち引きの交代時間はあるものの、満潮になるまでには充分である。軍艦岩の南側は、浅瀬で潮水の底は白砂に恵まれている。両脚でゆっくり歩いてその白砂を押しつけていくと、砂の中からエビが現れる。透き通る姿は見分けがつかないぐらいだ。そっと足指で触る。パッと後ろに飛びすさる。体長は10センチぐらい。その干瀬は、冬場は、岩礁の陰や、砂の中に沈んでいる岩のその下に隠れて、しゅくがじっとして住家としている。つかまえようと、岩をそうと持ち上げて、用意したザルの中に移す。そして、ザルごとゆっくり持ち上げる。潮水は流れ落ち、ザルには岩が残る。すると、岩の裏側に体長5センチぐらいの平べったい獲物。持ち帰った記憶はない。エビにしてもしゅくにしても、潮水で洗い、口に運ぶぐらいだ。あるいは、兄（みい）ぐあがやっているのを見ていただけだったかも知れない。このように、その辺りは豊かさがある。そう云えば、その干瀬には小さな川が流れ込んでいる。夏枯れで消失することもある小川だ。浜を遡り、向こうの県道越しの藪へと続くところの一角が深みになっている。いつだったか兄ぐあが鰻を釣っている。大きな獲物を掲げて、得意になっている。ここには、いわゆる雑糞水ではない、清らかな水が干瀬へと流れ込んでいるのだ。

干瀬での最大の獲物に出会う。場所は浜辺に近い干瀬、浅瀬で岩礁に囲まれた小さな潮たまりだ。うぶが泳いでいる。突然、岩陰から頭を出して、うぶに食いつくやつがいる。すばやく又岩陰に引っ込む。これに気づいた兄ぐわ。「うつぼだ」と叫ぶ。周りに童（われん）ぐわが集まる。岩陰から、少し顔を出した頭は、獐猛な目で前方を睨んでいる。兄ぐわが云うことには、「午後、もう一度来て仕留めよう」干瀬時間はまだある。午後、私はもう一度行って見る。兄ぐわはつゆ草を持っている。青く小さな花をつけた草は、茎が四角柱で節目がある。その茎のところを指でつまむように圧縮すると汁が出る。この草を一かかえ、すり鉢大の手ごろな窪みに盛り上がるほど入れる。そして一緒に持ってきた真石（まあいし）で打ち付けて、つぶす。汁が出てくる。少しずつ底に溜まる。この汁を潮溜まりに撒き散らす。汁には魚を麻痺させる毒素が含まれている。まずは、この毒汁でうつぼの身体を弱らせるのだ。次に、うぶを釣り針にかけ、餌とする。いよいよ、うつぼの潜む岩陰にそっと垂らす。静かにおびき寄せようと構える。一方では引続き毒汁を撒き散らしながら、様子を窺う。時間が経過する。なかなか、餌に食いつかない。そのうちにきっと体が痺れてくるだろう。息を飲むいつときだ。じっと耐える。そして、とうとう獲物を仕留める。うつぼは、おそらく、干潮になっても、沖へと戻らなかったのだろう。めったに見られない光景だ。目撃者は10人ぐらい、いたのではないか。昭和27・28年頃のことである。

4. 満潮となり、干瀬が隠れる

浜まで波が押し寄せ、浜は静かな岸辺となる。干瀬は沈む。潮水が潤い、たまに、体長50センチ余りの魚が躍っている。ある日、泡にまみれたものが浮いていて、岸に打ち寄せられている。兄ぐわが云う。「軽石だ」軽い石ころが泡にまみれてふわふわ浮かんでいる。「桜島の石だ。」噴火で吹き飛ばされた溶岩が、空中で冷えながら、千切れて落下する。潮水で急冷したときに岩石の中の空気が膨張した岩が散らばり、軽い小石になったんだろう。よく、ここまで、流れ着いたものである。

錦江湾は一面に軽石が浮かび、南下して、更に種子・屋久島の脇を漂い、そして、口之島の西方、東シナ海から吐喝喇海峡を北東に流れる黒潮にぶつかる。その黒潮に乗っても軽石ははじかれる。再び、南へと、吐喝喇群島の島々の太平洋沿岸沿いを漂う。とうとう徳之島に辿り着く。その後も他の軽石は更に旅を続けるのだろう。軽石を持ち帰る者がいる。表面を磨いて、たわしにするそうだ。

波が打ち寄せる浜辺は夕方ともなると落ち着いてくる。ある夕方、下駄を履いた兄ぐわが腰を下ろし、静かに本に集中している。期末を迎えた試験の追い込み勉強をしている。背にする岩の頂上を越えて、その先は蔵越ヶ丘（うんがくしんばり）、県立徳之島高校がある。浜辺は、生徒たちの良き勉強場所となっている。また、ある日から、突然、その浜の窪地に、かまどが据えられ、大きな平たい鍋が架かっている。うぎ汁を煮詰める、あの鍋と同じものようだ。潮水を汲み取って真塩を取るのだろう。あの場所は人の所有地だと思うが、持ち主なのだろうか。ある時、北にある軍艦岩を指差して、「あの岩はわしの物だ。」と云う老人がいた。

5. 干瀬から満潮に移行するとき、干瀬は様変わりする

干瀬のときに、一番沖のほうまで行ってみる。そこから先は、太平洋の紺青色の深い海となる。岩礁の真下は釣りの最適地でもある。兄ぐわが箱型のみかぐわんで、じっと、海底を窺っている。伊勢えびでも狙っているのか。禁魚とか解禁の期日はあるのだろうか。あるいは、黒鯛を釣ろうとしているのか。見ていなくても時間を忘れる。やっと、われに返り、干瀬の先の、遠い浜の方を見やる。満潮の動きが既に始まっている。干瀬から突き出た大岩は、だんだんと潮の流れに飲まれるように小さくなる。ここで、岸边に引き返さないと危ない。100~200mの距離はある。少年には、岸までは遠くにあるように見える。岩を飛び飛び渡り、沈みつつある岩に脚をとられ、濡れながら急ぐ。やっと辿り着く。その時間は僅か数分間だったろう。長く感じたものだ。満ち潮の勢いに圧倒されたことは、その後も、過去を振り返るたびに思い出し、怖い思いに遭遇したことに、今でも引きずられることがある。

数年たって、この、干瀬が様変わりする記憶がよみがえる出来事に会う。あの本と映画である。「青幻記」である。本の発売は昭和42年、映画は48年である。沖永良部出身の童話作家の一色次郎が著す。その時の思い出は、確か、月刊展望を発行する出版社の受賞作だったように思い込んでいた。読んだ記憶はない。児童作家が大人の小説を書くことが不思議に感じる。題名から幻想的な感情が伝わってくるのを憶える。映画化もされ、観てはいないものの、広告を見たイメージだろうか。浮かんでくるものがある。麦藁帽子の少年と日傘をさした母とが、夏のまぶしい陽射しをうけている。その広告コピーには、二人して遊んだエラブの海で母と別れる少年のひと夏の思い出、というようなことが表現されていたように思う。

今回、初めて、文庫本を手にとって通読する。第三回太宰治賞を受賞していることを知る。私小説の傑作という。満足感を覚える。小説を少し紹介しよう。干瀬については、母と少年とが、「サンゴ礁の潮干当（しおひど）に草を浮かべて遊んでいた。」と表現。窪みの池をつくっているところ、つまり既述の、うつぼが迷い込んだところを指すが、「ホウ」と表現。二人で貝を拾ったり、魚を取るつもりでいたのでビクを持っている。そのビクからひとつかみの根毛を取り出した。とある。「根毛の汁は海の魚を酔わせる力を持っていた。」と表現。既述のつゆ草と云う名ではなく、沖永良部島の方でデリスのヒゲという。潮は満ちてきつつあり、母は遊びつかれていた。「お母さんは、くるしくなりました。」と少年に訴える。病身の母は身動きできなくなったのである。この後は盗作するわけにはいかない。涙なくして読むことができない結末だ。母は、死を予感して、故郷での思い出を少年に残してあげたいとしか思えない。小説ではあるが、明らかに、一色次郎の母親がモデルになっている。エラブの海の描写は、紀行文に比しても遜色のない作品だと思う。

6. 南海の孤島から旅立つ

かつて、祖父の家の庭に生えている、がじゅまるの樹の間から望むかなたには、サンゴ礁に打ち寄せる白波が眺められた。夜は潮騒が聞こえてきた。その実風景は失われたものの、心の中には、いつまでも残っている。島で生れた我々は、一度は島を後にする。離れてしまったままの人あり、帰る人あり、また、往復する人がいる。

吉満が、若き日を思い出して、「南海の孤島」と、書き始めている文章がある。唯一、徳之島を意識した言葉である。そして、最後の方に「東方の異教徒の少年にも」とあり、この徳之島で、普遍的な真理に出会った、という、輝くような喜びを込めて、文章を結んでいる。

大きな世界へと、実感を以って羽ばたいた吉満は、世界が生きる舞台となる。生誕110年、没後70年近くなる。今では、伝説の人と云われているようだ。いや、決してそれだけではない。と思う。徳之島の風土が成長の原点となった、身近な人となりを感じる。魅力溢れる人で、項を変えて伝えたい。

吉満 義彦：100年に一人と云われる日本を代表する秀才神学者であり哲学者（明治～昭和 東大卒 亀津出身）。

（平成26年12月30日 記）

徳之島の民話(3)

国立国語研究所 所員外研究員
徳之島郷土研究会 顧問 本田碩孝(井之川出身)

みなす・みたてる

わたしたちの日常の生活では、あまり使い慣れないことばですが、徳之島の人々（ご先祖様と言った方がよいかも知れませんが）は自然にある物の特徴をとらえ、あるものに見なしたり、みたてたりしております。このように書くと難しそうですが、そんなことはありません。前回、紹介しましたユワタシガミ（イワトシガミ）などもユワタシガミとみなしたといえます。具体的な話で紹介しますから身近な話をぜひ聞いたりして、徳之島「夢」振興会議事務局に寄せて頂けるとありがたいです（以下事例は常体）。

〔事例1〕 ショージ石

井之川の東側海岸に珊瑚礁の大きな岩があり、下側は長年の波や風による風化が進み削り取られている。遠くから見ると帆船が引っくり返ったようにしている。大昔、ホマイセン（帆船）が乗り上げて引っくり返り石になったそう。

【解説】 井之川の人ならだれも知っている集落伝承だと思ったのですが、そうでもないようです。

〔事例2〕 軍艦石

これも井之川の東側海岸に今に軍艦の鋭いタイガミ（船の舳先）が海に突っ込んで行きそうな岩が有る。軍艦石と小さい頃から伝承している。軍艦が乗り上げ引っくり返って石になった。

【解説】 井之川でも違った伝承もあるでしょう。・・・まず、編者の出身地井之川の事例を紹介しましたが、皆さんの島（集落）にも、いろいろ有ると思います。（次からは多くの人々が知っている話を紹介しましょう）。

〔事例3〕 寝姿山

徳之島子宝空港から北の方を見ると、寝姿山が。「洗い髪をした妊婦が海に髪をなびかせて仰向けに寝ている形に見たてて猫鼻を額に右へ鼻・顎・胸・お乳・腹・足にみたてている」（注1）空港の案内板には「ガリバーのような寝姿山とある」。（注1）『天城町誌』同町役場（吉岡為良）1978（昭和53年）22頁

〔事例4〕 びんだれ山

（注2）と俗称される山が徳之島町花徳（けどく。けいどう）の東天城中学校北側にある。本来はグスク（城）と言われる。（注2）ビンダレはびんだらい（鬢盥『広辞苑』）の変化した島口（方言）ことばであろう。

〔事例5〕 ゴリラ石

亀津にある徳之島警察署を過ぎてしばらく行くと緩やかな下り坂になる。左側に福島石材店があり、その東側海岸に形がゴリラに似た石がある。見る方向によってなるほどと思う。（注3）あちこち名前が付けられています。「島育ち」にある「沖の立神」（たちがみ）などもみたてた呼び名かも知れません。徳之島に立神と呼ばれる石を知りませんか。・・・徳之島では大きな岩でも石と呼ぶように思われます。

〔事例6〕 犬呼び石

島口では「いんゆびいし」。井之川岳の山頂には、どうしてこんな大きな岩があるのだろうかと思うのがいくつも有る。その一つが山頂から少し離れた東側の場所にインユビイシが。岩の上に登のは少しきついでども登と東側が広く見渡せる。なぜ、インユビイシか。民話では昔、大猪に追われてこの岩に登った。その時諸田池（注4）の所に犬が見えた。犬を呼ぶと来てくれて猪を追い払い助かった。それからそう呼ぶようになったそう。 （注4） 諸田村溜池出来。寛文10（1670年）徳富重成著『雑記集成』（2の24頁）『徳之島前録帳』の記